
季節風に抱かれて

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節風に抱かれて

【コード】

N8520K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

卒業旅行で知り合った添乗員、その人を愛してしまった。

ここまで、うまくやって来てなんで今さら別れるなんて。

彼女は人妻。でも、夫はずっと海外赴任なんだ。多分彼女もできたようだという話だった。

それならいいじゃないか。何も無理して別れる必要がどこにあるんだ。

僕たちは出会いが不自然と言えばそうだったかも知れないけど、
だけど、愛しあっているはずだ。

「もう、止めましょう。私は疲れたわ。夫と話し合いをしてくるわ」
「なんで。それなら、僕と結婚しよう」

「無理よ、私はそんな気はないわ。結婚は望んでないし疲れたわ」
「何だよ、それ」

彼女は36歳、子供はいない。仕事は旅行社の添乗員だった。僕とはその一つの企画で出会ったのだ。彼女は話もうまくて、僕のケチケチ卒業旅行でパリに行った時も、彼女の案内がいつの間にか心に響いていた。僕は友人と3人で行っていた。3人という数はいろいろ不便で、結局僕の相手は彼女というパターンができた。というより、僕の気持ちを友達が見抜いて、気を利かしてくれたのだった。彼女はショートカットでスタイルもよく、背も高い。目が切れ長で、和服も似合いそうだった。彼女は左手に結婚リングをしていたから既婚者ということは初めから知っていた。彼女は僕たちが22歳で大学卒業の旅行ということは知っていたから、お姉さん気分で接してしてくれた。飲みに行っても、ここならという店を紹介してくれたし、楽しくて写真もたくさん撮った。

添乗員ということで、楽しかった一週間はあっという間だった。僕はモンサンミッシェルの下で写した彼女の写真を一枚自分用にと

り、友達と一緒に写した写真を地元に戻った友達にも送った。その足で、彼女の旅行社に電話した。偶然とったのが彼女で、写真を渡したいというと、彼女は出てきてくれた。そして、その写真を受け取るとう言ったのだった。

「今日はこれから韓国に行くの。4日後に帰ってくるけど、その時に飲みましようか」

「えっ、いいんですか。嬉しいな」

「じゃ、その時に電話します。電話は知ってるから」

「あ、そうですね。申込書に書きましたね」

彼女は仕事場に戻って行ったけど、僕は突然の展開に興奮していた。年上の女性で憧れてる人から飲もうと言われたのだ。興奮して当たり前だと思った。僕は彼女が前にはいたけど、就職活動で落ちているうちに彼女は離れていった。いなくなつて半年だった。幸い、就職は決まつたけど、3月になつてやつとだった。ぎりぎりセーフだった友達と旅行に行くことを決めたのは、明日出発というチケットは格安ということとで友達がネットで見つけたのだった。

僕たちは以前ゼミの先生と、中国に研修旅行に行ったこともあり、パスポートも持っていたから、急な決定でもよかつたのだ。5泊7日でエコノミーの飛行機は辛かつたけど、僕たちはフランスの美しい風景に癒されていた。僕たちは就職活動で散々自尊心を失っていたから、海外に行くという切り替えが欲しかったのかもしれない。みんな50社以上、断られてきたのだから。

僕は小さな不動産会社に就職となつた。田舎には帰つても企業もないし、ニートの兄が親と住んでいる。そこへ、僕までが帰ったら親が困ることは誰の目にも明らかだった。

4日後、彼女から電話が来て、僕は待ち合わせの新宿へ出かけた。彼女はにっこり笑つて

「あれ、友達は？」

僕は、僕だけが誘われたと勘違いしていたのだった。恥ずかしくてつい友達は都合で来れないと嘘を言った。彼女は一瞬戸惑つたよ

うだったが、行きましようと思きだした。

彼女の連れて行ってくれた店は、少し暗くて、しゃれた無国籍料理の店だった。

「マスター、急で悪いけど二人になったの」

彼女は4人で予約してくれていたのだ。僕は舞い上がっていた自分を恥じた。それはそうだよなあ、と思うしかなかった。土産だとおいしいキムチも渡してくれた。友達の分はマスターにお詫びのしるしと言っであげていた。

彼女は旅行先では聞き役だったが、今日は友達だからと僕の質問にも気軽に答えてくれた。結婚して8年、子供はいなくて、夫は夕イに行つてると。今では年に2回しか帰つてこない。こつちも段々仕事が忙しくなつて、年に2回しか行けないとなると夫婦の仲は冷めていったように思うとつぶやいた。それでも、彼女は今の仕事が好きだから辞める気にはならないそうだ。

「子供もないし、友達のいないタイで夫の帰りをひたすら待つなんてできないわ」

「ご主人は来てほしいって言わないんですか」

「初めの頃は言つてたわ。だから私も月に1回行つたこともあつた。でも、だんだん向こうがどういふ状態か分からないから、話がかみ合わなくて、喧嘩になることもあつて」

僕はすれ違う夫婦の話を聞いてると、彼女の寂しい面もまた魅力に見えたのだつた。それから、いろいろ理由をつけて僕が誘うようになった。

それがあの雨の日。

「ごめんなさい。遅れて」

この日は休日だから早く会えると思つていたのに、彼女は1時間も遅刻した。僕は彼女から来れないという知らせを受けるのではとハラハラしていた。彼女は手紙を握りしめていた。夫の手紙は来てくれないなら別れようというものだった。

「もう、お払い箱よね、何もしてくれない妻なんて」

そう強がり言いながら、涙が一筋こぼれるのを僕は見逃さなかった。思わず、濡れている彼女の手を握りしめて、胸に抱き寄せた。しばらく彼女は泣いていたが、やがて、僕とホテルに行くことを拒みはしなかった。

それから2、3回彼女とはそうなったけど、それは、愛し合ってるからだと思つようにはしていた。それが、突然別れを切り出されたのだった。

「僕を何だと思ってるの」

「ごめんなさい。でも、貴方を愛してはいないって気付いたの」

「じゃあ、ご主人を愛してるのかい」

「さあ、今となってはそれも分からない。でも、しっかり話して終わろうと思つて。離れていても夫婦だったんだから。8年は長いわ」

僕は女々しく泣いたが、彼女は去って行った。僕は彼女がタイへ行くのもう帰ってこないということだと知っていた。彼女は夫を求めていた。いつもどこでも。僕と愛し合っているも。

残されたのは写真1枚。彼女の左手には結婚リングが光っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8520k/>

季節風に抱かれて

2010年10月8日12時09分発行